

絶滅危惧種の保全に遺伝情報を活用しよう

国内希少野生動植物種における遺伝情報の蓄積状況

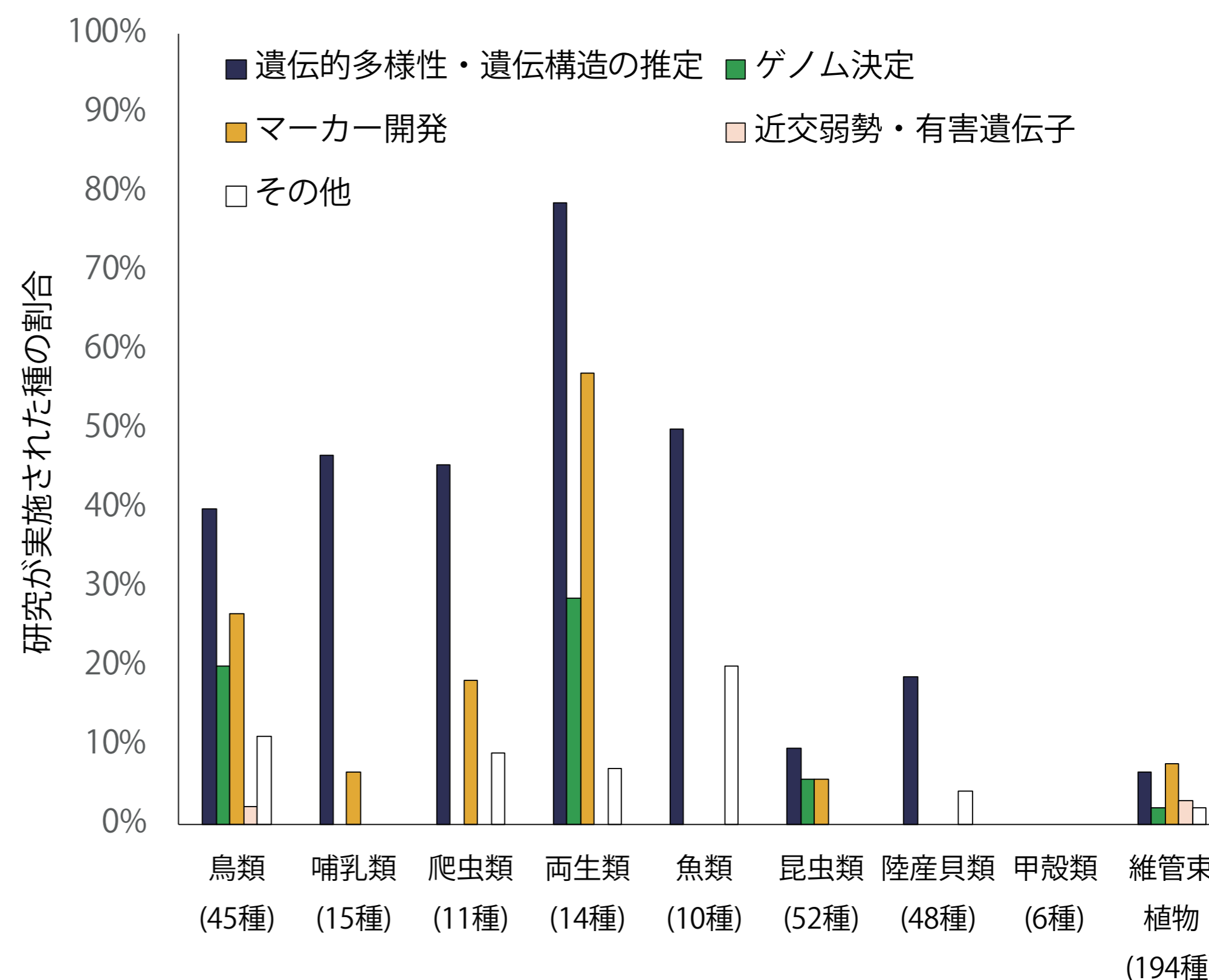


自然・環境再生研究部 生物資源研究グループ

中濱直之

絶滅危惧種の保全する際に欠かせない情報の一つが遺伝情報です。遺伝情報が分かることで、その生物の絶滅のしやすさが分かったり、また効果的な保全方法も分かるためです。絶滅危惧種の中でも特に絶滅の恐れが大きな生物は、種の保存法によって「国内希少野生動植物種」に指定され、採集や取引などが制限されています。こうした国内希少野生動植物種を分類群ごとに、どの程度遺伝情報が蓄積されているかを整理しました。

その結果をまとめたのが右の図です。哺乳類、鳥類、両生類、爬虫類、魚類などの脊椎動物では多くの種(およそ40%以上)で遺伝情報が明らかにされていました。一方で、昆虫、陸産貝類、甲殻類などの無脊椎動物では、遺伝情報が明らかとなっていた種が非常に少なかったことが分かりました。また植物については、遺伝情報の蓄積された割合自体は低かったものの、これは指定された種数が多かったためと考えられました。一口に絶滅危惧種といっても、分類群によって大きな偏りがあり、特に無脊椎動物では研究が遅れていることが明らかとなりました。



(図) 各分類群ごとの、研究の進捗状況。研究内容を5つに分類し、研究が実施された生物種の割合を示している。各分類の下部に、国内希少野生動植物種に指定されている種数(2021年12月現在)を記載している。(中濱ほか 2022)